日本の星名事典

事典・読み物
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

北尾浩一　著

原書房　A5判　464頁　本体3,800円＋税

本書は，星の和名研究の第一人者である北尾浩一氏の著書である．

すばる，三ツ星，ウオツリボシなどの星の和名といえば，真っ先に野尻抱影氏（1885〜1977）の名前を思い浮かべる方も多いかと思う．野尻氏が幅広く和名を収集してまとめた著書『日本の星星の方言集』（1957年）や『日本星名事典』（1973年）などは，現在でも基本文献として，プラネタリウムをはじめとした天文普及の場はもちろん，幅広い分野において用いられている．一方で，半世紀も前の本が第一線で使われている事実は，この分野の研究者がいかに少ないかということを物語っている．実際，この分野の研究には，天文学だけでなく民俗学や歴史などの幅広い知識，そして人々と接するフィールドワークも必要で，簡単には取り組めないのも事実である．そんな中，北尾氏は40年にわたって日本全国を歩き回り，それぞれの地域の人々が生活の中で呼び習わしてきた星の名前や伝承を収集・考察されている，数少ない現役研究者である．

本書は北海道から沖縄まで，著者が長年の調査で自ら採集した星の和名に加え，野尻氏をはじめとした先人たちの成果もあわせた約900種類におよぶ和名を事典形式にまとめ上げた渾身作である．構成は，第1〜第4章が春夏秋冬の和名をまとめたメイン部分で，加えて明けの明星，宵の明星，流星，彗星，未同定の星をまとめた付編と，巻頭の序章からなる．

事典なので目に止まった項目から気軽に読み始めることができるが，読み進めると，事典の無機質な印象とは異なり，読み物としても楽しめることに気が付く．評者も，北尾氏が現地で聞いた話者の言葉がそのままカッコ書き（インタビューのテープ起こし形式）で書かれているのを読みながら，自分も一緒に話を聞いているかのような感覚になり，また話者から聞いた星の歌の楽譜を見ながら口ずさみ，思わず楽しんでしまった．

ところで，星の和名というと単に昔の人々が使っていた風雅なものとかノスタルジックなものだと思いがちだが，必ずしもそうとは言えない．実際，星の和名には古い時代の文学作品や和歌，俳句などと同様に，日本人の自然観や宇宙観を解き明かす鍵が秘められている．そんな和名の奥深さを示唆するのが，巻頭にある序章「日本の星名の誕生」である．わずか8ページと短い章であるが，著者は日本の地理的特徴や歳差の影響，人々の暮らしのスタイルと星の見え方の関係など，和名を広い視点から読み解くキーワードを挙げており，いわゆる「天文学（てんぶんがく）」の対象としてアプローチする時の手がかりを示している．フィールド調査をメインとする研究者である北尾氏が，さらなる研究のバトンを読者に託す思いが感じられる章である．

ともあれ，本書は読者の興味に応じて自由に読み，必要に応じて活用することが可能な点が魅力と言える．日本の星文化を海外で紹介する時や，ちょっとした話題のネタ探しの際にも役立つ．そしてもちろん，日ごろから天文普及に携わる人にとっては，自らの知識の裏付けやアップデートに有用である．類書が少ないこともあり，手元に置きたい一冊である．

嘉数次人（大阪市立科学館）